

## 第1回SCカフェ アンケート/経験者(N=415)

問2. 今回の生活支援コーディネーターカフェについての感想をご自由にお書きください。また、より詳しく知りたいと思った点がありましたらあわせてお書きください。

### <感想>良かった点

- ・ テーマの「心に残る出会い」のコーナーは共感できて良かった。
- ・ 研修のような固い感じはなく、本音の部分を知ることができた。経験談を率直に話されたので、親しみを持てた。
- ・ 他市町村の先進的な事例を、色々な立場の方から聞くことができ、とても参考になった。
- ・ Q&Aに寄せられた皆さんの生の声が聞けて、同じ悩みを共有できたのが良かった。
- ・ パネラーの生活支援体制整備事業に対する思いや考え方が大変参考になった。
- ・ 低迷していた活動に勇気と元気をいただいた。地域とのつながりは足で稼ごうと思う。
- ・ 質疑応答に徹する形式が良かった。
- ・ カフェと同時進行的にQ&Aが展開されていたのが画期的だった。
- ・ 先進的な活動をされている方々の活動や思いを聞けて、刺激を受けた。コロナ禍でも動けることはたくさんあるなと気づかされた。
- ・ 意見交換を見学できるというスタイルはあまり経験したことがないので新鮮だった。また、孤独な不安を和らげることができた。
- ・ 協議体の構成員や開催方法について、とても参考になった。もっと自由な発想で活動したいと思った。
- ・ パネリストの話も聞きながら、Q&Aの動きも把握しながらの司会進行がとても上手かった。
- ・ 協議体は「出会う、話す、気づく、つながる」が必要だとのご意見にとっても共感した。
- ・ 最初はサンドバック状態のところから話し合いを重ね、形が出来上がっていくなど成功事例までのプロセスなど聞くことができ、やはり行政とも地域とも連携や話し合いが大事だと改めて感じた。上手くいっているところはハートが熱い、地域・行政との連携がしっかり取れていることが共通していると思う。
- ・ パネリストの方々それぞれ手法や内容は様々でも、粘り強く活動していくことで住民との信頼関係や成果を得られていると伝わってきて、自分ももっと明確な狙いや自信をもって活動に取り組みたいと刺激を受けることができた。
- ・ 生活支援コーディネーターの役割や地域との関り、行政との思考の差、地域の洗礼など新人からベテランまでが思っている事が聞けて、孤独感が薄れた。
- ・ 以前なら、中央に集合しなければ研修できない環境をWebサイトで作り上げたことは、参加者に大きなメリットがあると思う。コロナ禍ならではのメリットかと思う。
- ・ とにかく外に出て地域の方々を見て声を聞く重要性を実感できたとともに、今のコロナの現状存分に出られないことへのもどかしさを改めて感じた。
- ・ 自治体によって生活支援コーディネーターの配置のされ方や立場が様々であることが理解できた。
- ・ 地域に向き、住民の思いに寄り添い目の前にいる方を支援していく。今、そう感じていることで良いんだ、という確認ができた。そういったことを積み重ねていきたい。とにかく地域に出て行こうと思う。
- ・ 「先生は地域住民」、「活動ができなくてもグループがあるだけで安心感がある」、「地域住民の活動にはまっぴいっく口をはさまないことも大切」、「選択肢を増やす活動」、「たずね上手」、「理論よりも感情が行動を促す」、さまざまなキーワードを知ることができたので、学びになった。

### <感想>改善した方が良い点

- ・ パネリストが多く自己紹介が長かった。長すぎても集中力がもたないので2時間くらい開催にして回数を増やしてほしい。
- ・ 事前に資料配布があると良かった。
- ・ 活質問が流れてしまうところがとても残念。
- ・ テーマが多い上、広すぎるので、もう少し絞った意見交換をしてほしい。
- ・ 質問をする際の匿名は禁止にしたほうが良い(匿名性をいいことに、配慮の欠けた投稿が見受けられたため)。
- ・ 活動に困っている生活支援コーディネーターの悩みが解決されるような内容にあまりなっていなかったように感じた。
- ・ あらかじめスケジュールなどがあると良い。途中で休憩時間もほしい。
- ・ 気軽に意見交換をと思っていたので、それぞれパソコンを用意してやらなくてはと思っていた。環境が整わなかったSCが参加できなかったのが残念だった。
- ・ 各パネリストの情報をもう少し丁寧に最初に掲示してほしい(1層が行政なのか、社協なのか外部組織なのか、聞いていいるうちに混乱)。
- ・ 各市町により生活支援コーディネーターの活動形態(行政、社協、住民等)が異なるので、次回は自身と同じ活動形態の方とグループで話ができればと思った。
- ・ 参加者同士での意見交換はチャットになる旨、事前に明記してほしい。もっと住民目線の意見も出し合いたかった。
- ・ 参加と言ってもお互いの顔が見えずコメントしかできない、そのコメントも大半が匿名というのが寂しく感じた。
- ・ 話の内容が第1層や行政に関するものが多く、第2層の新人としては聞きたい内容と離れていた感じがする。
- ・ もう少し質疑応答の時間が長ければ、より有意義な時間となりそう。
- ・ 行政批判があり、お困りごとを話しするのはいいが、批判的にならず、課題に対しての提案だけでいいのではないかと思った。

### <感想>生活支援コーディネーターの課題

- ・ 全国的に行政・社会福祉協議会・生活支援コーディネーターとの壁のようなものが根強くあることが分かった。
- ・ コーディネーター間や地域住民とのネットワーク構築が重要であると感じた。
- ・ 行政の考えを生活支援コーディネーターに伝え、一緒に活動していくことが重要だと実感した。
- ・ 生活支援コーディネーターには専任でないと大変な業務だと思った。現状としては、兼任が多いのも悩みが多い原因だと思う。
- ・ 多様な場やバリエーションの為に、尋ね上手になりつながりを広げていく事が大事。
- ・ やる気や思いのある自治体や生活支援コーディネーターが揃わないと進まない事業なのだという印象が強く残った。やる気と思い、その上での連携があればそれは何事においてもうまくいくと思う。
- ・ 地域性や所属が異なるのが、生活支援コーディネーターの難しさだと思った。
- ・ 行政は特に異動も多い為、失敗談等も含めた記録をしっかりと残しておくことが大事だと感じた。「失敗から学ぶ」ことを可視化し一般化できると今後新しく生活支援コーディネーターになる方にとっても参考になるのではないかと思う。

<ul style="list-style-type: none"> <li>行政と包括、包括と社協、社協幹部と生活支援コーディネーターの距離感が、市町によって大きな差があることが衝撃だった。事業担当職員の危機感と使命感によって、自治体の地域格差は更に広がると感じた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>生活支援コーディネーターを孤立させないために、行政側への徹底した研修が必要ではないか。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>すぐ相談できる環境にないことが苦しい。悩みや考えを共有できる人がいれば心強いのだが。同じような立場の方との情報共有、情報交換をしていきたいと強く思っている。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>協議体のネーミングはなかなか住民の方に分かりづらいので、楽しそうな名前をつけてきてほしいなと感じた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>どう1層(市)と連携していくかが課題と感じた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>協議体については、担当する地域性や所属する職場、社協や行政などがとても複雑に絡みあうものなので、やはり難しいものだという印象があった。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>どこの地域でも住民への理解・協力を求めることの難しさ(やらされ感)を感じた。生活支援コーディネーターには打たれ強い精神が必要。</li> </ul>

<p><b>&lt;より詳しく知りたいと思った点&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>民間企業との連携のポイント。</li> <li>コロナ禍での活動で工夫した点。</li> <li>協議体における、行政とのかかわりについて。協議体のあり方、苦勞しているところなど。</li> <li>もう少し日頃の悩みや成功事例をじっくり聞きたかった。</li> <li>パネリストが第1層の方が多く、発言も多かった。第2層の方の話をもっと聞きたかった。</li> <li>失敗例、苦勞話を聞きたい。</li> <li>第2層生活支援コーディネーターの地域への出方や声掛けを知りたい。</li> <li>移送支援に至るまでの取り組み(方法)、具体的な活動内容。</li> <li>民間企業との連携について。</li> <li>有償ボランティアについて。</li> <li>高齢者のゴミ出しの支援をしている団体や支え合い活動について。</li> <li>B事業等の仕掛け方や住民への説明など。</li> <li>兼任の生活支援コーディネーターの話。</li> <li>移動販売について。</li> <li>地域ケア会議の考え方を知りたい。</li> <li>認知症支援と生活支援体制整備事業を一体的に進めている事例。</li> <li>地域の皆さんに説明される際の資料や話の流れ、特に重点的に伝えていること、伝え方など、地域に行う説明。</li> <li>各市町村の地域包括ケアシステムの状況と生活支援コーディネーター活動の係わり状況。</li> <li>質問の多かったものに関して、まとめて情報を発信してほしい。</li> <li>行政が3層の活動をする場合の気をつける点。</li> <li>世帯数の多い地域での活動の具体的な提案。</li> <li>第1層、2層、3層の立場や役割の説明。</li> <li>思うように活動できていない現実があるので、同じような状況の生活支援コーディネーターの声も聞いてみたい。悩んだことを知りたい。</li> <li>住民主体(協議体)と生活支援コーディネーターの関係性の体験談。</li> <li>コロナ禍でのニーズ把握方法や活動。新しい生活様式という面での取り組みを知りたい。</li> <li>委託元である行政側のパネリストの意見をもっと聞いてみたいと思った。</li> <li>地域包括支援センター所属の生活支援コーディネーターの話。また地域性もあると思うので、例えばZoomなので地域の環境が分かる動画を流すのも良い。</li> <li>活動内容の記録をどのような様式で行っているか、見える化するにはどんな工夫が必要か。</li> </ul>
---

問3.「生活支援コーディネーター応援サイト」は、生活支援コーディネーターの情報交換や交流のためのサイトです。このサイトに希望することがありましたら自由に記入してください。

<ul style="list-style-type: none"> <li>現役の行政の方々と交流したい。</li> <li>次回のカフェの案内や、役立つ研修の情報等、リアルタイムで。</li> <li>自由に悩みや体験談を共有できるような掲示板。</li> <li>こまめな情報更新。</li> <li>気軽に相談している、お悩み相談室。それに対して今回のパネリストの方々などから助言(コメント)がいただける仕組み。</li> <li>フリートークタイムを定期的に設ける。グループチャットのような感じでのやりとり。</li> <li>カフェ(ウェビナー)でのQ&amp;Aを掲載。</li> <li>匿名やニックネームでの投稿。</li> <li>グループ別の部屋(成功/失敗事例紹介の部屋、苦勞話の部屋、移動支援の部屋、移動販売の部屋など)。</li> <li>地域や人口規模、所属毎の部屋。</li> <li>いつでも閲覧できる事例動画、カフェの動画などを配信。</li> <li>立場毎(包括・社協・民間等)の窓口。</li> <li>生活支援に関する様々な情報にアクセスできる。</li> <li>生活支援コーディネーターの困りごとに対するマッチングシステム。</li> <li>地域支援をしてくれる企業とのマッチング機能。</li> <li>研究結果紹介など、左脳を刺激するデータの紹介。</li> <li>他部門毎(生活支援、居場所、サロン)との相談窓口。</li> <li>アプリ化し通知が来るようになる。</li> <li>同じ立場の生活支援コーディネーターと交流できる場。</li> <li>行政の関わりも大切という考えが多かったので、行政の方にも見てもらえるようなサイト。</li> <li>主催者側から有益と思える内容(先進事例など)の定期発信。</li> <li>何か知りたいことがあれば、参考にできる、ヒントをもらえる場所。</li> </ul>
--

・ 委託側と受託側の交流の場(不平不満を言い合うのではなく)。
・ 動前向きなエネルギーを注入できるサイト。
・ 毎月テーマを設けて、そのテーマに沿って情報・意見交換する。
・ 「はじめの一歩コーナー」初心者コーディネーターが日々の活動を報告し合い、お互いを励まし合うコーナー。
・ カフェ参加者からの交流会依頼等の提案の受け付け。
・ ネットに不慣れな利用者にも使いやすい、分かりやすいサイト。検索機能が備わっているとありがたい。
・ 生活支援コーディネーターとして業務をしている中で感じている思いを気軽にほざかせる場。
・ 協議体で使用しているレジメ・会議録や会議の様子の写真等掲載があるとイメージが付きやすい。
・ 自分の地域と似た地域を検索して、そのコーディネーターに何らかの形でアクセスして相談できるシステム。

問21. あなた自身がこれまで行ってきたり開発してきた生活支援コーディネーターとしての活動において、特徴的だと感じる活動や工夫してきた活動について自由に記述してください。

<b>&lt;連携・協働&gt;</b>
・ 新たなサロン活動の展開にあたり、地域の公民館と連携。
・ 市内の他の生活支援コーディネーターと連携を取りながらの企業回り。
・ 災害時の支援物資集積場、配布を住民組織で行った。
・ 民間事業者の参画、多職種の参画、通いの場からの生活支援サービスの創出。
・ 地域の防災協議会と共同し、「防災」と「ささえ合いの推進」の二つを担うポスター作成し、広報掲示板・自治会掲示板・全戸住民にチラシを配布。
・ アンケート調査⇒マッチング。
・ 地域のキーパーソンへの働きかけや民生児童委員等からの情報収集等。
・ 公立病院を中心とした医療介護福祉の関係職連携の場づくり。
・ モデル地区を決めて、そこに住んでいる75歳以上の在宅に住んでいる方への訪問アンケート調査を、地域住民の方と公民館に協力してもらい実施。
・ 地域包括支援センターと協働でグーグルマップのマイマップ機能を活用した地域資源マップの作成・共有。
・ NPO法人(地域のお寺を拠点に寺子屋プロジェクトを実施している団体)に所属する学生たちと地域を繋げる取組を実施。
・ 高齢者の現状を知ってもらうために、担当地区の元気な高齢者と看護学校の学生との交流会をマッチング。
・ 社協事業と連携して買い物ツアーやゴミ回収サービス、住民参加型生活支援サービスのしくみづくりに取り掛かっている。
・ 民間企業・団体等の地域貢献活動情報(交流の場・通いの場の活性化支援に資する取り組み)の可視化や顔の見える関係の構築。

<b>&lt;サポート支援&gt;</b>
・ デイサービス送迎車を活用した買い物支援の取り組み。
・ 買い物支援として移動販売の取り組みを大手コンビニで行った。高齢化率が40%を超えている地域に、週2回、移動販売車が走っている。
・ 自治会との買物支援(移動販売)。
・ 入浴通所事業:入浴のみのサービス(通所付き添いサポートを活用し送迎・入浴見守りサポーターを活用)。
・ 通所付き添いサポート事業、通いの場(地域サロン、百歳体操)への付き添い(送迎)。
・ セラピストの専門性を活かした居場所の創生。
・ 徘徊高齢者の見守りについて、「見守りシール」を導入。
・ 高齢者の多いマンションの理事会に移動販売を紹介し、導入していただいた。
・ 社会福祉法人の空き車両を活用した地域の高齢者の買い物支援。
・ ゆるやかな見守り・ゆるやかなつながりプロジェクト推進による地域関係希薄化解消のための活動。
・ デイサービスの送迎の空き時間を活用した買い物バスの運行に向けての活動。
・ 自分の所属している社協は、小さい町の移動手段としてオンデマンドバスの運行を行政から委託を受けている。
・ 地域の声掛け見守り活動、緊急時の声掛け安否確認。
・ 地域の集いの場を移動販売車が巡回することで買い物支援と住民同士の支えあいを促進させる活動。
・ 地縁団体に組織的におこなっている除雪支援。
・ 移動販売車担当者、福祉委員、社協とで会議を重ねたり、高齢者や包括からのニーズ把握を行い、市内に新たに移動販売車が走るようになった。

<b>&lt;活動立上げ&gt;</b>
・ 配食団体立上げ支援(協議体・プロボノ・介護予防・地域包括ケアなどの要素取り入れて立上げ)。
・ 地域のお助け隊の活動の立上げを住民と企業と共に行った。
・ 地域のマップ作りを通して第二層協議体を立上げた。
・ 地域課題に即したサロンの立上げ、運営支援。
・ 大学と地域を繋ぐ活動。学生主体の運動サークルの立上げ支援。
・ 動画作成し啓発、高齢者お役立ち情報サイトの立上げ。
・ まちづくり協議会と行政との連携による住民団体の立上げ。
・ NPOと協働で支え合いの仕組みの立上げ、担い手養成講座から支え合いグループを創設。
・ 協議体として「地域福祉を考える会」の立上げ。
・ 園芸をテーマに講座を開催し、結果として活動グループの立上げにつなげた。
・ 広域フードバンク事業立上げ協力(事業計画や契約書等も作成)。

<b>&lt;交流&gt;</b>
・ 多世代交流の場づくり、地域食堂など。
・ 認知症カフェ。町内の小さなカフェの店主、医師と協力し月1回開催。
・ 離島地域のサロンと本島地域の老人クラブとのマッチングで、離島地域に出向き、交流会を実施。
・ 地域資源を使った居場所づくり(サービス付き高齢者住宅(民間)、お寺)。

・ 大学構内でのふれあい喫茶の立ち上げ支援。
・ 住民の意見交換会の際に物々交換(バザー)を行い参加者と交流。
・ 地域の方々と話しあいを重ね、つどい・交流の場×(かける)移動販売を実現。
・ 「花のまちづくり」を地域の方々と一緒に活動している。種から育てた花を各地区50鉢のプランターに植え付けみんなで花の世話をする。
・ 公園内の県の管轄のレストハウスを利用して自主事業として集いの場を開催。
・ 小中学生と高齢者の居場所づくり。
・ 自宅前にテントを張り、煎りたて、挽きたて、淹れたてのコーヒーを地域住民に提供し、情報収集を実施。

<b>&lt;オンライン、ICT&gt;</b>
・ お寺でのLINEはじめて講座。
・ 認知症カフェや体操教室のオンライン導入サポート。
・ 学生ボランティアとの交流も含めたスマホ講座。
・ Zoomでの住民主体の生活支援活動の情報提供。
・ 高齢者に対応するスマホ講師養成講座。
・ 地域資源の発掘と見える化(FacebookやInstagram)情報発信、オンラインコミュニティ(多世代交流)開催。
・ 民間企業と連携してスマホ教室を開催。
・ 「Zoom deつながる体験編」や「Zoom de話そう！」を企画。
・ 民生委員・児童委員向けのZoom研修会の開催。
・ 生活支援コーディネーターとして地域資源の把握のために地域活動取材して「コーディネーターブログ」を作成し地域へ情報を発信。

<b>&lt;情報誌&gt;</b>
・ 地域資源情報の冊子化。
・ 地域の情報誌を定期的に発行。
・ 名刺の他、生活支援コーディネーターの役割等を記載したパンフを作成して配布。
・ フレイル予防の冊子を作成。
・ 「生活支援コーディネーター通信」を作成して、地域での活動を紹介。
・ 市民の顔が見える広報誌(社会資源のPRや募集、行事の周知等)を毎月発行。
・ 生活支援サービス実施店冊子の作成、更新。
・ 生活支援に関するインフォーマルサービスの冊子(市ホームページに掲載)。

<b>&lt;男性向け支援&gt;</b>
・ 男性シニアの居場所づくり・いきがいづくりとして、『男性シニア共同菜園ボランティア講座』を開催し、ボランティアグループの立ち上げを支援。
・ 「男の教室」、定年後の男性の地域デビューを目指し講座を企画。参加者から集ってOB会を開催。企画や支援をしてもらっている。
・ 男の料理教室など「男の～」シリーズ(民生委員の発案で)。
・ 閉じこもりがちな男性高齢者向けのイベント等を企画・運営。

<b>&lt;コロナ禍&gt;</b>
・ コロナでマスク不足の時期にマスクボックスの設置を公民館にお願いし、回収したマスクは学校等へ寄贈。
・ コロナ禍での緊急事態宣言中、防災無線でラジオ体操を流してもらった。
・ コロナ禍で交流や外出の機会が減ったという意見が多数あったため、地域包括支援センターと協働し地域を歩くお散歩ラリーを開催。
・ コロナ禍、「頑張っている方へありがとうを届けよう」とメッセージを広く集めて展示やウェブでの公開。
・ コロナ禍で頑張るあの人へのありがとうのメッセージを集め届けるプロジェクト。
・ コロナ禍なので屋外にベンチを置き、その場所に移動販売を増やしての住民の居場所づくり。
・ コロナ前は小学校の授業内でサロンが開かれましたが、今年は小学生からビデオレターが地域のサロンへ送られ、高齢者は寸劇で答える予定。
・ 「コロナ禍に負けない！ミニミニ作品展」を開催(自粛中に高齢者が自宅で作ったマスクや折り紙、彫刻等の作品を展示、コロナでもできる事があると意識啓発)。
・ 社協内ミニデイ、老人会で「チャレンジカード」としてコロナ禍中、自宅や屋外でも活動を促し、20チャレンジで粗品&ミニ賞状をプレゼント。

<b>&lt;運動&gt;</b>
・ 大手葬儀場で体操教室を立ち上げたこと。
・ 集いの場として、「百歳体操」を実施。
・ ご当地体操のラジオ放送開始。
・ 地域カフェ内で地域の老人保健施設リハ職によるワンポイント体操実施。
・ 体操スタンプカード(介護予防)を市へ提案し採用。

<b>&lt;ボランティア活動&gt;</b>
・ 大学生の有償ボランティア団体立ち上げ。
・ 住民の力によって有償ボランティアの活動組織立ち上げ。
・ 有償ボランティア団体の立ち上げ。
・ ちょこっとボランティア(登録制の無償ボランティア)。困りごと相談を生活支援コーディネーターが受けてちょこボラ活動者へのマッチングをしている。
・ 完全ボランティアによるごみ出し支援事業。
・ 多世代交流の場にお年寄りにボランティアとして参加を依頼。

<b>&lt;その他、ユニークな取り組みなど&gt;</b>
・ 高校生による認知症予防パズルの作成と普及。
・ 金融機関に特化した認知症サポーター養成講座の実施。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 協議体で活動を始める話になると、まず予算の話が出てくるが多かったので、他市町村を参考に協議体や居場所への補助金を作成。</li> <li>・ 公民館活動の取材。</li> <li>・ 地域で安価での包丁研ぎを立ち上げ。場所を無料で借りて、包丁を研げる人を探し、広報は自治会が協力してくれた。マニュアルも作成。</li> <li>・ 認知症紙芝居を使い、小学校、地域などで認知症の情報周知。</li> <li>・ シルバー川柳作品の応募（H28年度からスタート、新春、夏、コロナなどテーマごとに素晴らしい作品が集まっている）。</li> <li>・ 地域の健康長寿者を取材して、健康長寿の共通点を見つけ、地域へ周知、社協内で展示。</li> </ul>
--

問24. 生活支援コーディネーターとしての活動において、困っている点や改善への取り組みについてご自由にお書きください。

<p><b>&lt;周囲への理解、交流、連携&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域への入り方。</li> <li>・ 地域に向く際に、市との委託契約に沿った高齢者にかかわる限られた行事しか認めてもらえない。</li> <li>・ 周囲が生活支援コーディネーターの活動を理解すること。</li> <li>・ 生活支援コーディネーターの認知度が低く、福祉関係先や自治会等との情報交換が進まない。</li> <li>・ 町内会との接触機会の創出。</li> <li>・ 地域を訪問し高齢者の方と関わりを持つ様になっているが、その意味や今後の活動に繋がっていくのか不透明。</li> <li>・ 地域支援はすぐに結果が出ず時間がかかるものなので、進捗状況や成果をどのように周囲に伝えていけば良いか悩んでいる。</li> <li>・ 住民主体の生活支援の必要性について、うまく住民に説明できていない。</li> <li>・ 他の市町村コーディネーターとの連携による課題の解決方法。</li> <li>・ 所属する社協と、市の高齢福祉課・地域づくり課との連携が取れていず、板挟みになったりすることがある。</li> <li>・ 地縁団体や自治会などの各団体との協働の仕方。</li> <li>・ 職場内の連携。職員同士の話し合いの場を設けてほしい。</li> <li>・ 地域の企業との連携ができていない。</li> <li>・ 地域全体、他の生活支援コーディネーターとの歩調の合わせ方。</li> <li>・ 地域活動に際し、地域住民の協力や理解が得られない。</li> <li>・ 第1層SCが一人だけであり、気軽に相談できる人がいない</li> <li>・ 生活支援コーディネーターの役割の理解は同じ事業所のスタッフも難しい。孤立化しやすい。</li> <li>・ 地域住民や関係機関などの協力が得られないことに困っている。</li> <li>・ 対面での活動自粛の中、Zoomを利用した集いをしたいが、高齢者世代からの理解が得られない。</li> <li>・ まずは自分がもっと地域に出て、課題など人を把握する事が必要かなと感じる。他の方も協力しながら取り組んでいく事が大切。</li> <li>・ 委託元の市包括支援センターとの関係がうまくいっていない。</li> <li>・ 「ささえあい講話」を将来的に小学校・中学校でもすれば、支えあい活動の輪が広がり、お互いが思いやれる住みやすい街に発展するのではないかと。</li> <li>・ 行政、第1層、第2層の所属先での意見の相違がある時に、活動が進まない。国の施策に現状が追いついていない。</li> <li>・ まずは地域を知ることから始めている。</li> <li>・ 地域包括では個別支援がメインとなり、なかなか地域へ働きかける部分が少なくなりがちで、どうしたものかと悩むところだ。</li> <li>・ 長期間に渡り地域に携わり続けることで、地域での関係性が見えすぎてしまうことに弊害を感じている。</li> <li>・ 課題としては1層SC(市担当課に配置)が毎年交代し、相談・協働する体制が弱いと感じる。</li> <li>・ 1層2層の連携、基幹型包括と委託包括、社協との連携で悩んでいる。お互いの仕事を知るために地域回りを一緒に行うなど工夫してみたい。</li> <li>・ 個別ケースを担当しているケアマネが地域資源の開発人であると思うが、生活支援コーディネーター活動の中では一番連携が取りづらい</li> <li>・ 行政、包括、社協、もしくはそれぞれ個人で生活支援コーディネーターや生活支援体制整備事業についての考え方が違う。</li> <li>・ 行政(包括)と社協(所属先)の板挟みになっている感が強い。</li> <li>・ 包括との連携が取れない。</li> </ul>
--

<p><b>&lt;活動方法&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 活動の組織化や施策化に意識が偏り、住民目線になれないことが多い。</li> <li>・ 包括支援センター業務との兼務で、どこまで取り組んでいいのかわからない。</li> <li>・ 活動の見せ方に工夫が必要と感じている。</li> <li>・ 活動がなかなか実を結ばない。</li> <li>・ ということに取り組んで行って良いかわからない。</li> <li>・ 目指す具体像が描けていないこと。</li> <li>・ 長期計画についてプランを立てたいがどこを何を軸にすればいいか。</li> <li>・ 自分のおかれている立場で動いていい部分の領域がまだわからない。</li> <li>・ 課題は山積しているのに、何をどうしたらいいのかわからず未だに理解できていない。</li> <li>・ 何から始めていいのか迷っているうちに、どんどん日が過ぎてしまう。町の中で出会った人に挨拶して声をかけるよう、意識している。</li> <li>・ 第2層だが担当地域の範囲や人口が多く、住民にとって満足のいく仕事ができているか不安。</li> <li>・ 県の研修で学んできた考え方に沿ってきたが、年度が変わり講師の所属が変わったことで考え方が変わったことで修正に苦労している。</li> <li>・ 地域づくりに当たる場所がないために拠点を作ってくれるよう要望をまとめたが、力不足を感じている。</li> <li>・ 住民への周知の仕方、生活支援体制整備事業に関しての取り組みの方向性がない。今の仕事のやり方でいいのかと日々悩んでいる。</li> <li>・ 生活支援体制整備事業について知らない人に説明することが難しいので、パンフレットや事業推進計画等を作成して文字化する作業をしている。</li> <li>・ 1層の役割、具体的な活動がわからない。2層や行政との連携の仕方がわからない。</li> <li>・ 自立支援会議に参加する意義がいまいよくわからない。</li> <li>・ 第1層として何に取り組んだらいいのかわからない。第1層協議体委員の存在意義が見えない。</li> <li>・ 個別ケア会議の課題を1層での会議にどのように生かしていけばよいか。</li> </ul>
---

＜人手・時間の不足＞
・ 地域の担い手の発掘。
・ ボランティア活動をしてくれる人が少ない。
・ 他業務が多く、地域に出る時間が取れない。
・ 時間がない。
・ もっと包括と連携をして動きたいが、相談が忙しすぎて言い出せずにいる。
・ 協働してもらう地域住民が少ない。元気な高齢者は働いているなど忙しく、ボランティアの層に限られている。
・ 広い市に、現時点では1層が市に一人、社協に2層が二人と少ないこと。
・ 色々な組織の研修が多く、活動時間の確保が課題。
・ 高齢化が進む中で、構成員の増員が難しく不安を感じる。
・ 記録する時間が取れないまま、時間が過ぎ去っていく。
・ 週3日程度の勤務であるが、地域と関わっていると3日を超える働きになることがしばしばあり、少しオーバーワークになってきた。
・ 包括の相談員業務が多すぎる。緊急性のない活動は後回しになるし、個人情報でない生活支援の作業は自宅に持ち帰らないと時間が足りない。
・ 兼務の中で時間を作ることが非常に困難な中、必要なアウトリーチや膝をつき合わせて住民との会話を大事にしたいというジレンマを抱え、悩んでいる。
・ 小さい町社協なので、兼務の嵐。生活支援コーディネーター業務に関われる時間が限られている現状がある。

＜コロナ禍＞
・ コロナで地域の集まりに参加する機会が少なく、地域の実情を理解しきれていない。
・ コロナ禍で住民の話し合いや活動、訪問が制限されていたこと。
・ コロナ感染症対策について、それぞれの考え方の違いがあり、活動しにくい。
・ コロナ禍により、地区に出向くことができないので、本来の仕事をするのが出来ない。
・ コロナの影響で活動を見合わせている団体が活動をやらないことに慣れてしまい、再開の方法などの話し合いの場面の設定もできないでいる。
・ コロナで活動が制限されている。どこからどう取り組めば良いかわからない。
・ コロナ禍に生活支援コーディネーターとなり、活動が止まっていたり、人と繋がるのがほとんどなく、地域の事がわからない。
・ コロナ禍で活動が全くない時期があり地区の住民との距離がまた遠のいてしまったように感じる。今後感染対策をしながら地区公民館へ出向きたいと思う。
・ コロナの影響で地域活動が停滞、モチベーションをあげて、感染対策をしながらの活動に取り組んでいる団体が少ない。
・ コロナ禍でサロン活動が止まり、他に代わるような事業の提案について困っている。
・ コロナにより様々な活動が休止状態にあり、恐らく住民の方のモチベーションも下がってしまっている中で、もう一度、再スタートができるのか不安。
・ コロナ禍での活動において、感染予防など専門的知識がなく、活動状況の良い悪いの判断ができない。
・ コロナ禍でもフレイル予防が重要であることを国も提唱してほしい。各省で統一したコロナ対策を出してもらえないと地域の理解が得づらい。
・ 感染対策を行いながら活動を再開。サロンや地域食堂で行っている感染対策や開催の仕方の工夫を他の活動団体に伝えたり、互いに情報交換している。
・ コロナ禍での活動の進め方について。各種活動を住民主体で再開できるようにするためのアドバイス。
・ 行政との兼ね合いもあり、コロナ禍で活動することに抵抗感が大きい。責任問題になるため、動くことができない。
・ コロナ禍で「集まれなくてもつながる方法」による新しい取り組みを行えたこともあるが、やはり対面の交流でしかできないこともあることを再認識している。
・ 昨年の配置で、コロナ禍での状況しか知らない為、通常の状態が分からない。またこれ以降もコロナ禍以前とは異なると思われる為、先が見えにくい。
・ 独居老人の見守り訪問で、マスク使用での会話が顔の表情がわからず、笑顔も見えず、声も聞こえにくく、面談にすごく困る。

＜孤立・孤独＞
・ 一人での活動なので相談できる相手がおらず、孤独を感じるが多々ある。
・ 職場の支援がなく、協力頂ける方も少ないので、孤立していると感じる。
・ 課題に直面した際の相談先。
・ 住民に助け合いの必要性をどうPRしたらいいかわからない。見本もなく、自分でゼロから切り開いていくのがしんどい。
・ 地域包括内に配属されているため、業務への理解がなく孤立している。地域活動などは包括職員が行っているため、自分の立ち位置がつかみにくい。
・ 周囲は兼務の人が多く、専属である自分とは本気度に温度差を感じる。
・ 社協内で生活支援コーディネーターの仕事が理解されておらず孤立。手探りでやっているが時々自分が何をしているのか分からなくなる。
・ 周囲からなかなか理解してもらえないため、辛い時がある。
・ 同じ市内の2層と1層との温度差。自分が達成感を味わったことでも共有する仲間がいないのも寂しく思う。
・ やることが多い(コーディネーターというが繋げるだけが仕事ではない。通う場、ないサービスの創出、協議会開催、ボランティア担い手養成、地域の把握など)
・ 丸投げや孤立、地域・職場におけるハラスメント的な言動に疲弊しているSCは多いと思われる。

＜行政との関わり＞
・ 行政との関係性。行政の思いと生活支援コーディネーターの思いが上手く交わらないことが多い。
・ 縦割り行政の煩雑さ。
・ 行政への報告書の見せ方。
・ 行政になかなかつながらない。
・ 行政から取り組み内容や評価内容が決められていて地域の実情にあっていないこと。

・ 行政に市の担当者はいるが、第1層生活支援コーディネーターがいない。第2層で挙げた課題が政策に結びついていくのか普段の業務からは分からない。
・ 行政の事業を社協が請け負ってやっているが、もう少しお互い歩み寄ってほしい。
・ 毎年のように行政職員がかわるので、相談したり頼れる人が少なく、どのように仕事を進めていったらいいのかいつも迷っている。
・ 行政と社協が縦割りではなくもっと連携し、安心して暮らせる地域づくりをめざしていけるような体制が必要だと思う。
・ 行政のとの地域共生の温度差。
・ 行政の理解は得られているが、行政もどのように相談に乗ったらいいか、協力の仕方がお互い密になっていない現状はある。
・ 小学校区に1人程度の生活支援コーディネーターを増やし、生活支援体制整備事業専門の部署を作り、明確な市町村の方針を立ててほしい。
・ 住民の移動手段の改善について、行政と連絡をとっているがなかなか改善策が見いだせず。
・ 生活支援コーディネーターの業務は明確に定まったものではなく模索の連続で、行政主導の取り組みとしてはかなり特殊かつ難易度が高い気がする。
・ 行政がなかなか現場にこない。行政側からつくられたシステムがおりてくるが、実際に現場では活用しづらい内容になっている。
・ 民間企業も地域の一部として考え、一緒に取り組んでもらう考え方をどう行政・法人に浸透することができるか。
・ 困っていることや要望を市に言える環境があるのはいいと思う。
・ 今回このカフェに参加して、改めて行政担当と体制整備の重要性についてしっかり協議ができる機会をこちらから打診したいと思った。
・ 委託業務を行政・所属法人から丸投げされていること。自由にできるメリットもあるが、自分の活動が正しいのか分からない。

<b>&lt;協議体&gt;</b>
・ 協議体での話し合いにおける、話す力、ファシリテーション技術不足。
・ あて職の協議体で交代もある為、理解が進まず、地域性が引っ込み事案で慎重派、取り組みの企画提案が進まない。
・ 協議体の会議を年に何回開くなどの縛り。
・ 協議体の維持方法に困っている(特に地域の担い手等の確保)。
・ 協議体の在り方、メンバー。
・ 協議体の運営の際にメンバーの温度差がある。
・ 協議体の必要性を地域の方に理解していただくための説明会を兼ねた集まりを設けて、協議体へと進めているところだ。
・ 1層協議体の運営について。
・ 生活支援体制を整えるための協議体がない。
・ 地域によっては2層協議体を作る事に理解を得られない所があり、どう働きかけをしていくか難儀をしている。
・ これまでの取り組みが少なく協議体も0である。どのようなことから始めればいいのか困っている。
・ 協議体について、地域の状況に応じてする、しないを検討してほしい。現在、担当している地域は必要ないと思う。
・ 明確な目標を持った協議体ではなく、茶話会的な状況を大事にしたものなので、今は皆さん「楽しい」と参加してくれている。
・ 現在、協議体の構成員が行政及びOBがほとんどで、民間団体や地域住民代表といった参加がないため、関係者に呼び掛けている。
・ 「協議体」として立ち上げることにこだわったり、実績を求めるのではなく、その自治体で何を大切にしていきたいか一緒に考える(何を協議体と呼ぶのではなく、その根っこにあるもの)ようになったら良いと思う。

<b>&lt;その他&gt;</b>
・ そもそも世間の生活支援コーディネーターの認知度が低い。国は政策に入れるなら、もっと周知してほしい。
・ 地域づくりの予算がどのように使われているか、またどの事業に使えるか明確になっていない。
・ 若い生活支援コーディネーターの育成、バトンタッチ。
・ 「ボランティア」というものへの考え方の変化(無償、やりがいで続けられるか)。
・ 成果がどうしても協議体数や参加数など、数として見えるものになりがち、本当にやるべきこととのギャップを感じる。
・ ICTの活用、少人数での会議の提案(少しでも地域の声を拾えるようになりたい)。
・ 専門職というより、地域活動している住民生活支援コーディネーターであることから、2層の平準化が難しい。
・ 事業が住民主体を標榜しながら、地域を1層とせず自治体から1層、2層と数えている点、自治体がなじみづらい事業名、会議体名をそのまま委託型包括を通して地域に下ろしている点に疑問を感じている。
・ トップの熱意によって結果が変わってくる事業なので、市民にとって不平等。
・ SOSネットワークについて、協力してくれる機関を増やしたいと思う。形だけでなく本当に使えるサービスを作ってほしい。
・ 活動者や地域関係者の高齢化が著しい。

問26. いま研修で学びたいと思うことを簡潔にお書きください。

・ 地域アセスメント
・ 移動支援
・ 具体的な成功事例や失敗事例、先進事例
・ モチベーションの維持
・ 協議体の設置、開催、進め方
・ 行政、社協、社会福祉法人、医療、福祉等、多職種との連携について
・ 地域への介入方法、住民主体の地域づくり、仲間づくり
・ 民間企業との連携
・ 買い物支援において、スーパーなど事業所との連携
・ コロナ禍での活動
・ 空家活用の事例
・ ICTをうまく地域活動に取り組む方法、高齢者のICT支援、ICT活用事例
・ 有償/無償ボランティア活動(担い手の発掘・養成)
・ ファシリテーション技術
・ 生活支援コーディネーターの基礎・応用
・ 介護保険事業全般

・ サービス創出の方法、支え合い活動創出の方法
・ 地域資源の活用方法
・ 地域への社会資源の発信の方法、共有や活用、マッチング方法
・ 生活支援体制整備事業について
・ 地域ケア会議のあり方
・ 重層的支援体制整備事業について
・ 介護保険関係の情報
・ 現場視察
・ 自治会とのつながり方
・ 兼務している生活支援コーディネーターの活動の仕方
・ 具体的な活動に関する予算の組方・予算確保等、活動予算に関して
・ 介護予防と社会参加について